

---

# あにとぼく

津凪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あにとぼく

### 【Zコード】

N7432M

### 【作者名】

津風

### 【あらすじ】

一人暮らしをしたいと言つ僕、鈴木愛斗。二十歳。

母や父よりも心配する一卵性双生児の兄、朝日と月夜。極度のプログラ。

どうしても兄離れしたい僕だが、兄たちはそんなことにも構わずに2LDKの物件を見つけてくる。どう見たってこれは、一人で住むには広すぎる。

## (前書き)

初投稿になります。  
使い勝手がまだ分からないので、プロローグ的な作品となつております。はつきり言って、起承転結がありません。

「僕、一人暮らししたいんだ」

家族揃つて夕食をとっている最中、そう言つた僕の言葉に真っ先に反応したのは兄だった。

「何だつて？ この家を出て行くのか？」

「え、ちょ、何で？ まさか彼女ができる？」

呆れた顔で僕は言つ。

「朝兄、夜兄、落ち着いて。僕がバンドやつてるのは知つてゐるよ？」

瓜二つの顔をした兄たちが顔を見合わせる。

「そうだぞ、月夜。落ち着け」

「そうだよ、朝日。落ち着いて」

一日に一度は見かけるやり取りに、僕は心の中で呆れる。

僕の兄は一卵性双生児だった。口の悪い方が朝日、我が鈴木家の

長男だ。草食系男子を思わせる口調は月夜、次男。

「二人とも静かに。愛斗の話が聞こえないでしょ」として僕が末っ子の愛斗である。

「それで？ 何で急にそんなこと言い出すの？」

と、母が僕へ問いかける。

「本格的に、プロを目指そうと思って。簡単にはなれないって分かってるけど、やつぱり表に出たいんだ」

現在、僕は音楽系の専門学校に通つて裏方を学んでいた。そこで知り合つた友人らとバンドを組んでいるのだが、卒業を機に僕らは本格的な活動を始める決めた。

「それじゃあ、学校は？ 就活、まだやつてるんでしょう？」

「もちろん、卒業してからの話だよ。就活は、ほら、どうせ内定もらえないしさ」

ちらりと見た父は聞いているのかいなか、ただ食事を続けている。

「何言つてゐんだよ、愛斗！ 諦めちやダメだろ」

「そつだね、愛斗。本当にやりたいなら良いと御づよ」

小さな会社で細々と働くサラリーマンの朝兄と、幼い頃に憧れた小学校の先生となつた夜兄が睨み合つ。

「だけど愛斗、お前料理できないだろ？」

「掃除に洗濯もしなきゃいけないんだよ？」

「うん、分かつてる。少しづつ頑張るよ」

母が「少しづつって……」と、不安げにご飯を口へ運ぶ。

「だいじょうぶだよ。僕、もう二十歳だもん」

すると、父がようやく口を開いた。

「金がないと、一人暮らしさ出来ないぞ」

「分かつてるよ、父さん。高校の時、バイトで貯めたのがまだあるし、とりあえずいけると思う」

そこで溜め息をついたのが兄たちだった。

「そつか。仕方がないな」

「愛斗一人じや、父さんも母さんも心配だよね」

そして二人が僕を見る。

「俺と一緒に暮らそう。それでいいな？」

「俺と一緒に暮らそう。それでいいよね？」

同時にムツとして睨み合つ。どうしてお前が、と兄たちが言い争うのも気にして、母が言った。

「一人で暮らすのつて、意外とお金かかるのよ。それでも良いの？」  
僕はすでに決意をしていたので、迷わなかつた。

「うん、一人で暮らすよ」

本音を言つと、これを機に「ラソンな兄」一人から逃れたいと思つていた。何故なら、今も目の前で「俺が愛斗と住むんだ！」なんて言つて合つて居るような兄たちだ。口にはしないが、マジでウザい。

その後、何故だか僕に2LDKの間取りの書かれた紙が渡された。

「何、これ」

ペラリと紙をめくつても、それはやっぱりただの紙。

「駅近、洋室、バルコニー付き。条件は全て満たしてゐるぞ」「家賃はちょっと高いけど、俺らが五万ずつ出せば良いだけのこと」と、朝兄と夜兄。

「え、あの、だから何？ 何なの？」

「二人の考えていることは分かったが、聞かずにはいられなかつた。「何つて、俺たちの家だろ？」

「言わなかつたっけ？」

「……初耳です」

両親に何か言われたのではなく、それは兄たち自身の意思だった。

「な、何で？」

「愛斗一人じや、心配だろ？ 犯罪に巻き込まれない為にもだな

る。

「一応言つておくが、僕は男だ。名前が可愛らしいせいでの、幼い頃は女の子に間違えられたらしいが、今の僕はどう見ても男性である。「それに今時、一人暮らしするにも家賃が高いんだよ。でも三人なら全然安いでしょ？」

「は、はあ……」

でも、アルバイトでしっかり稼げばどうにかなるだらうし、光熱費は節約するつもりだ。

「というわけで、ネットで探してみたんだが、どうだ？」

朝兄に言われて納得がいく。きっと、仕事中に探して勝手にプリントアウトしたのだろう。どうりで見慣れないはずだ。

「俺も一応探したんだけど、テストの採点があつてさあと、夜兄。

「……あの、悪いんだけど朝兄、夜兄」

「何だ？」

「何？」

僕を見る四つの目。

「僕、一人で住みたいんだ」

一人で、といつ言葉を強調して言つと、二人の兄は同時に呆然とする。

「二人の好意は嬉しいけど、僕ももう大人だから、ね？」「けれども僕の兄はそう簡単に分かつてくれる人たちではなかつた。でもお前、まだアルバイト決まってないだろ？ 月にいくら稼げるか分かんねえんだぞ」

「帰りが遅くなると、いつも夕飯抜いちゃうでしょ？ でも俺がいれば料理作つて待つてるよ」

必死な朝兄と、冷静だがどこかおかしい夜兄。こんな光景は今までに何度だつて経験してきた。その度に僕は一人に圧倒されて妥協してきたが、今回ばかりは違うぞ。

「だつて、僕ももう、いくつか部屋見て来ちゃつたし、一人で住むつて決めたから」

「駄目だ！ ちゃんと稼げるようになるまで一人暮らしは許さん！」「洗濯物とか、ちゃんと干せる？ 愛斗、全然やつたことないでしょ？」

「いや、だから僕はもう大人だし、兄さんたちだつて引っ越したら通勤が……」「その心配はないぞ。俺は途中で地下鉄に乗り換えて一時間で着く」「俺だつてバス使えば二十分だよ。むしろ楽になるから、ありがたいね」

まさかすでに調査済みだつたなんて……今更ながら、本当にブラコンは恐ろしいと思う。

「あ、でも僕、みんなに一人で暮らすつて言つちやつたから」「何だよ、兄弟と暮らすのが恥ずかしいっていうのか？」「むしろ仲良しの証拠なんだから、素敵なことだよ」

そういうことじやないのだけれど、僕は昔から優しい子で、あまり人を傷つけるのが得意ではない。

「違うんだよ、二人とも」

だが、今回は何が何でも断るつて決めたんだ。兄たちには負けないぞ。

「僕はね、その……」

勢いこんで言つたものの、言葉が上手くまとまらなかつた。そのせいで言いたいことが声にならない。

「本気、なんだ。本当に一人には悪いけど、邪魔してほしくないっていうか、えつと」

悪い言葉なら浮かぶのに、一人の傷ついた姿を見るのが嫌で言い出せない。朝兄も夜兄も、ウザいんだ。僕に構わないでほしい。

「とにかく、三人では暮らせないんだ。僕は一人が良いんだよ」口を閉じた一人が、どこか寂しそうにこちらを見ている。そんな目されたつて、僕はもう大人なんだ。いくら兄弟でも、今回は絶対に僕の意思を貫くんだ。

「分かったよ、愛斗」

朝兄がそう言つて、思わず僕は期待する。

「本当に?」

「うん、今回はちょっとやりすぎたかもね」と、夜兄まで……！ 初めて兄たちに勝つた、と心の中で歓喜する僕の耳に、一人の声が重なる。

「「とりあえず三ヶ月、一緒に住もう」「え？」

朝兄と夜兄が僕を見て言つ。

「愛斗が一人でやつていけるようになつたら、一人暮らしをして良いぞ」

「どうせ、俺らもこの家から出ようと思つてたから、ちょうど良いよ」

「……あ、朝兄？ 夜兄？」

まるで、開いた口が塞がらない。

「何だ？」

「何？」

二人の兄が不思議そうに僕を見る。

「あ、あの……えっと、な、何でもない」

彼らの頭の中に『僕と離れる』という選択肢は存在しないようだ。

料理は夜兄の担当で、掃除は朝兄の担当。洗濯物は三人が日替わりですることになった。

「アルバイトの面接、どうだった?」「

と、テーブルに食事を並べながら僕へ問う。

「うーん、微妙な感じ」

鞄を自分の部屋に放り投げて、食卓へ向かう。

「朝兄はいつ帰るつて?」

「さあ? メール来てない?」

すっかり主夫が板についた夜兄は、翌日のお弁当の分まで計算して夕食を作る。

「ちょっと待つて

と、ポケットからケータイを取り出すと、ぼぼ同時に着信が鳴った。

「もしもし、朝兄?」

すぐに耳へ当てるが、ノイズ混じりに朝兄の声がする。

『今帰つてるところだ。面接、どうだった?』

「うん、微妙だったよ」

やはり双子だと、気になることも彼るらしい。

『どうか。ま、諦めずに新しいとこ探そつな』

『は悪いが優しいのが朝兄だ。』

『ところで、ちょっと玄関の方に行つてほしいんだが』

「え、何?」

何かあつただろつかと、僕は素直に玄関へ向かう。

「来たよ」

と、電話越しに言つて、向こうで朝兄が小さく笑つた。

直後に玄関の扉が開いて、何かを手にした朝兄が現れる。

「ただいま、愛斗！」

「……おかれり、兄さん」

僕は呆然としながら、抱きつかれなくて良かつた、と思つた。小學生の頃ではあるが、似たようなことがあつたのだ。あの頃はよく抱きしめられていたのもあつて、軽くトラウマである。

「お前の好きなケーキを買つてきた」

と、箱を僕へ渡し、靴を脱ぐ。

「あ、ありがとう……」

何となく、同棲しているカップルのようだと感じるのは氣のせいだろうか？

「俺の分はー？」

と、台所から顔を出す夜兄へ、朝兄は言つ。

「馬鹿、あるはずねえだろ」

片手でネクタイを緩めながら頭を小突く。夜兄が不満げに文句して、僕の名前を呼ぶ。

「愛斗、どうしたの？ 戻つてらっしゃーい」

「うん」

そつと箱を開いてみると、僕の好きなレアチーズケーキが、きちんと三つ入っていた。僕の兄たちは、仲が悪そうに見えてとても仲良しだ。

(後書き)

今回の三人を軸とした物語を現在、構想中です。  
三人暮らしでのドタバタになる予定です。愛斗の音楽活動、バンド  
のこととも関連させていきます。  
双子つて、良いよね。

意見や感想などあれば、よろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7432m/>

---

あにとぼく

2010年10月8日11時22分発行